

## 木村家の歴史

源頼朝の時代より明治維新まで七百有余年の歴史を有する岩村城であるが、近世の城下町が形成されたのは江戸時代の初め松平家乗が入城してからである。岩村藩校知新館が設立されて文教藩として名高くなったが、経済面では東濃一の城下町が存在し、町人街の経営を担ったのが問屋であった。

木村家は江戸時代中期から末期に栄えた問屋（後に御用達職を兼ねる）で、先祖は三河国挙母藩（現豊田市）の藩士出身、寛永十五年（一六三八）の藩主丹羽氏信転封の際随行してきた。弥五八の名を世襲し八代目で明治維新を迎えている。苗字・帯刀、士分待遇の家柄で時に応じ藩の財政を支え、新田の開発や災害の救援、文化各面の発展にも大きな貢献を果たしてきた。

天保の藩政改革では多額の出費をうながされ、その後は酒造業などで家計を補強しつつ、維新を迎えることになった。

今も山城と町人街と武家屋敷地が息づき……

### ▲老梅書院

煎茶道の普及と成立に大きな役割を果たした八橋売茶翁の書額。六代目木村弥五八知英と交遊があり、当家を来訪滞在中、書院から眺めた庭の老梅にちなんで命名。  
（文化八年九月九日）

### ▼藍原舎

書院隣の四畳半茶室にある佐藤一斎（江戸後期の大儒）の書額。一斎は木村家との交遊が深く、木村家経営の織物工場が同家所在の「相原」地内であったので、織物と地名にちなんで命名。  
（安政三年）

### ▼武者窓

藩主米邸の折など見張りの窓ともなった。



……そのなかにあつて問屋・御用達職の風格をくぐどあつ

邸内には天正年間に計画された城下町形成のための疎水があり、酒造蔵はまた現代的な生活空間として改修されている。

## 木村邸の概要

木村邸は江戸時代の町屋としての様式をよくとどめた城下町の歴史をしのばせる建造物で町の文化財に指定されている。

母屋の建造年代は明確ではないが、十八世紀後半の頃と推察されている。

平入の前面格子造りで武者窓といわれる小窓がついており、奥行深く土間部と居室部とに分かれた片側住居である。書院棟はあとからの増築とみられる。

当初は表側にだけ二階があり、中の間、奥の間上部の二階や中三階は小屋組改造時に付加されたものである。このとき棟高を上げて屋根を板葺石置きから棧瓦葺に改めているが、当初の棟木・母屋や下方の小屋組はそのまま残されており、有力町人の邸宅としての構造を今に伝える優れた遺構（建造物）といえる。

かつては主屋に接した西側端に薬医門（写真）があり、藩主出入りの玄関も設けられていたと伝えられている。

また母屋背後の敷地内には四戸前の土蔵と酒造蔵の一部が残されており、文久三年（一八六三）の棟木墨書から城山の材木を拝領して建てたものであることがわかる。

### ▲土蔵棟木墨書

文久三年癸亥五月廿日知周代於御城山材拝受  
東方倉庫四ヶ所共撰吉辰同年建所也  
酒造蔵 棟梁 釜屋村 高津和吉重勝

文久三年五月廿日知周代於御城山材拝受 東方倉庫四ヶ所共撰吉辰同年建所也 酒造蔵 棟梁 釜屋村 高津和吉重勝

### 老梅書院

八橋売茶翁  
命名の書院。

